



〈特集〉新冠温泉レ・コードの湯 「おらがまちの温泉 効能は町民の絆」

平成8年9月、西泊津の高台で採掘されたお湯は、道立衛生研究所の検査の結果、日高管内初の「温泉」として認定を受けました。当時の岡裕町長はじめ、関係者や温泉を待ち望んでいた町民は大変喜びました。

その後、採掘されたお湯は、道立衛生研究所の調査を受けましたが、湯温・湯量が安定せず温泉利用には適さないことが判明、また、相当量の水溶性ガスが含まれるなどの問題もあり、温泉プロジェクトは暗礁に乗り上げ、調査は一旦打ち切りとなりました。

その後、採掘されたお湯は、道立衛生研究所の調査を受けましたが、湯温・湯量が安定せず温泉利用には適さないことが判明、また、相当量の水溶性ガスが含まれるなどの問題もあり、温泉プロジェクトは暗礁に乗り上げ、調査は一旦打ち切りとなりました。

新冠町は、20年程前から「レ・コードと音楽のまちづくり」を掲げ、独創的でユニークなまちづくりを進めてきました。

この間、町の様子は、レ・コード館が建設され、レ・コードパークや道の駅がオープンし、市街地が整備されるなど劇的に変化してきました。

このような近年の新冠町の成り立ちを、10代・20代の若い人や定住移住政策の推進などによ

り、他町から移住された方々は、知らない方も多くいることかと思えます。

その後、ボーリング調査をすることが決定し、汲み上げられた温泉の「温度」と「湯量」に基づき金額を決定する、ヒットアンドペイ（成功報酬）方式で業者との契約を結びました。

その結果「湯温33・1度、湯量毎分71・8リットル、ペーハー値8・5」と当初の予想を大きく上回る結果となり、ようやく「温泉」の認定を受けることができました。

このことから、「広報にいかっぱ」では、より一層「わがまち新冠」を知っていただくため、地域の情報を題材にした特集記事を掲載していきます。

平成7年7月に採掘作業が始まったものの、国内でも類を見ない深さの採掘は予定通りに進まず、当初予定していた深度2000メートルに達したの

「おらがまちの温泉」町内に新しく温泉が建設されることから、新しい温泉施設に町民の皆さんの息吹を吹き込み、思い入れを深く、いつまでも愛されるぬくもりのある温泉にするために、私たちは町民の皆さんが温泉づくりに参画できる手段としてこの基金を設置しました。

もない、町民の温かき、人のぬくもりを持つ、新冠町独自の心から暖まる効能を持った温泉が完成されたらと思いいこの事業を考案しました。（一部抜粋）

ました。

このように近年の新冠町の成り立ちを、10代・20代の若い人や定住移住政策の推進などによ

こうして、温泉の採掘開始から4年を経た平成10年12月、温泉施設「レ・コードの湯」がオープンし、町民が待ちに待った「おらがまちの温泉」を利用できるようになりました。

一口10000円で賛同者を募ったこの取り組みは、最終的には35000口を越え、温泉のロビーに建てられる主柱2本を購入し、平成10年8月に新冠温泉に寄贈しました。

平成10年にオープンした新冠温泉は、オープン当初は、年間利用客数を8万人程度と見込んでおりましたが、最終的には年間利用者25万人と、当初の想定をはるかに超える人気の温泉施設となりました。

の名称で28室の宿泊棟が完成しましたが、人気があり予約が取れないという理由から、平成15年には19室を増設し計48室とし、現在の形態となりました。

その後、採掘されたお湯は、道立衛生研究所の調査を受けましたが、湯温・湯量が安定せず温泉利用には適さないことが判明、また、相当量の水溶性ガスが含まれるなどの問題もあり、温泉プロジェクトは暗礁に乗り上げ、調査は一旦打ち切りとなりました。

この基金を設置しました。この善意と郷土愛にあふれた基金により、どの温泉の効能に

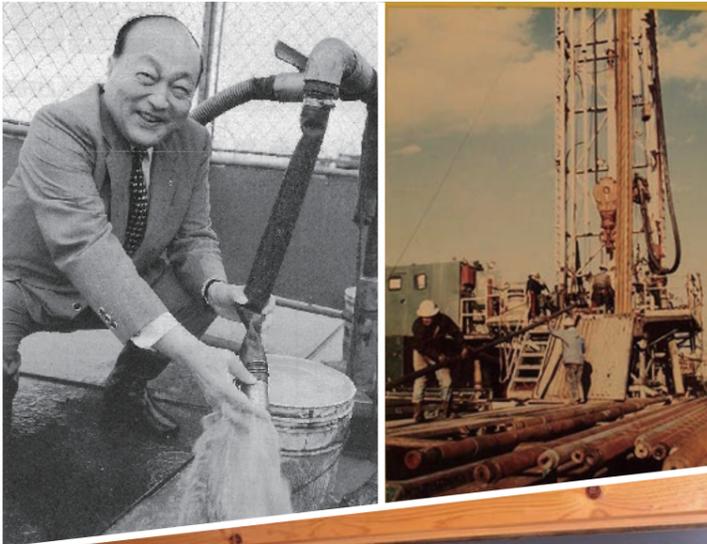
者名簿として今でも寄付していただいた方々の名前が掲示されています。

平成11年には「ホテルヒルズ」

時を同じくして、町では新しい温泉施設に付ける名前の公募を行っていました。約2週間の募集期間で、町内外から計181点の応募がありました。

写真／苦勞の連続だった採掘作業（右上）・温泉の湧出に喜ぶ岡町長（左上）・温泉のロビーに掲示されている主柱寄贈者名簿（下）

最終的に、浦河町在住の土内ひとみさんが「全国的にも新冠町といえばレ・コード、この知名度を利用しない手はない」という理由で「レ・コードの湯」という名前を提案し、採用され



「温泉」と「町民」の懸け橋に

新冠町青年団体連絡会議

遠藤博文議長（当時）
安田 学理事

青年団体連絡会議の白取勝宣顧問（当時）から「主柱寄贈のため300万円の寄付を募ろう」という話を聞いた時は、そんな大金を集めるのは、簡単ではないと思いました。

しかし、南こうせつライブを3回開催した結束力から、みんなで頑張ればできるだろうという話になりました。

最初は、一口一円で寄付を募る話もありましたが、一人でも多くの町民に参加して欲しいという思いから、一口10000円、目標数を30000口としました。当時の町内の世帯数が約25000世帯だったので、なかなか大きな目標だったと思います。

4月にチラシができ、それから6月中旬までの約2ヶ月間、会員それぞれが昼夜問わず、自分の仕事の合間を使って、町内の住宅一軒一軒まわり、寄付のお願いをしました。住宅を回り始めると「寄贈者名簿として温泉に名前が残るなら記念に」と家族人数分の寄付をしてくれる方が多



当時の話を聞かせてくれた遠藤さん（右）と安田さん（左）